

「小説太田道灌」読者の感想（抜粋要旨のかたちで）

声の主は大枠の行政区画とイニシャルのみで表示

◆「東国の戦国時代は起こっていたのですが、作家がなかなか手を付けない部分に光をあてられた素晴らしい作品です。作家が執筆しなかったのは、確たる史料がないのも一因のようです。だからといって手を付けなかったのは残念。太田氏の江戸城、道灌の死、道灌の主従関係、未知な部分がたくさんあります。作品ではこれらを乗り越える苦労が伝わってきます」伊東市 T.M 氏・歴史研究家

◆「読ませていただきました。何年かぶりに小説を読みました。医学書ばかりでしたので、仕事の合間に一気に読みました。面白かったです。次回を楽しみにしています」

横浜市 K.S 氏・医師

◆「周到的な史料の渉猟とその解釈に一家言をもって書き下ろされた本格的な歴史小説を、敬意をもって先ず読了しました。小生が研究している後北条一族の歴史の中で、早雲（伊勢新九郎）の同時代人（同年齢）の道灌は、興味の対象でした。関東公方・堀越公方・両上杉管領・三浦義同・大森氏頼ほか、守護大名今川氏などの興亡の陰に早雲と道灌との親交場面もあったと聞いています。これからさらに熟読してまいります」

鎌倉市 F.K 氏・歴史研究家

◆「拝読いたしました。これを受け取りタイトルを見た瞬間『うーん、歴史小説家か』と正直重い気持ちで眩きました。馴染みが無く、自分では手に取ることが無いからです。そんな私が読み始めから物語に引き込まれ、一気に読んでしまいました。まずはこの事をお伝えし、拍手を送りたいと思います。文章力や構成力の高さは今更いうまでもないことですが、何よりも人物一人一人が実によく描かれていて、それにより物語に深みが出たように思います。テーマは現代社会にも通ずる『人としての品格』でしょうか」

伊東市 U.O さん・同人誌主宰

◆「よく出来てます。ただし、筋としてもまた結末としてもとてもよく、一气呵成に読ませる筆は申し分ありませんが、こういうと辛口の批評になってしまうのですが、もう少し長く、いつもも言っていることですが、遊び、言葉の空間と申しますか、隙間、空気抜けがあっても良かったのではと悔やまれます。資料分析、解析力は、さすがとうならせる面は多分にありますが、一気に書き上げたスピード感があってとても良く、筋立ても素晴らしいのですが、潤滑油的な点が欲しい気がしました。筆の冴えも見られ、見上げたものです。よく纏められたと思います」小田原市 M.K 氏・画家

◆「もう一度落ち着いて読んでみたら、一読目には見えないものが見えてきたように気がします。やはり道灌の存在感は圧倒的ですが、そのほかの人物にもきっちり存在感があって、それが小説を重厚なものにしている気がしたのです。伊勢新九郎や季正、或いは兵庫無慙で主役を演じた曾我兵庫は言うに及ばず、あの定正の中にさえもしっかり人間性が感じられました。兵庫無慙の定正は、正直言って嫌な奴だとしか感じられなかったのですが、こちらの小説で描かれた定正は、あまりに過ぎた家臣をもった凡人の悲劇

というようなものが感じられて、どこか悲しい。或る意味、陽の主役が道灌なら、陰の主役はこの定正ではなかったかとも思えてきました。また一方には新九郎の暗躍があって、道灌と新九郎の対比も面白く読みました。冒頭にありました道灌になかった角とは、の答えがこの新九郎の中に見るような気がして、玄鬼の言葉にあったく生き方が綺麗すぎるというのが悲しく響きます。さっきから人物のことばかり言っているような気がします。私が強く感じたのは、非常に文章が鋭いというか、研ぎ澄まされているというか、例えば女流作家とかの描く歴史ものだと、戦の場面さえどこか王朝文学的な柔和さがあるのに対して、こちらでは静かな場面さえどこか張り詰めた緊張感が感じられて、特に最後の文章が印象的でした。これから先の下克上の暗い世を暗示しているような感じがして」 **秦野市 K. I 氏・文芸同人**

◆「太田道灌については江戸城築城の人物、そして山吹の花にまつわる人物としか記憶していなかったが、いい勉強になった。資料を自家薬籠中のものにしていて。十分に消化されていると思った。なぜ彼が定正に討たれたのか。主に謀反を企てた、単純にそんな図式ではないことが明らかにされていて、新しい道灌像が浮かび上がってくる。はなはだ魅力のある人物としてスポットが当てられているのが良い。脇役のそれぞれも生き生きと描かれている。定正にしても彼なりの苦衷が示されていて、単なる悪役でないのもいい。特に兵庫に筆が運ばれる場面は、正に彼の面目躍如として、それが道灌や定正をも生かしてくる。この兵庫という人物が非常に魅力的で、もし現存する人物だったら会って話を交わしたいと思う。それほど優れた男だと思わせる筆力に感服した。数人の女性も描かれ君なりに人物像を考えたのだろうが、男たちの描写にはいささか及ばないのではないか。誤解しないように。女性の存在が薄くても、それはそれなりにしっかりと描かれている。るいと菜摘、あの時代のしかもあの立場にある女の哀れさ、それを訴える力を感じる。ただやはり筆者が男であることが、男性像を生き生きと創り上げたことに、そしてその為にも女性像の彩りが淡くなったのではないか。二百五ページから最後までは一気に読んだ。緊迫した情景が道灌、兵庫の会話から醸し出されて先を急がされる思いだった。謀殺を知っていた彼、それをあえて受けた彼の心中を思うと、そこに一人の勝れた一代の英雄が辿らざるを得なかった残酷な歴史の面を見た」

横浜市 T. I 氏・元国語教諭

◆「権謀術数の満ちた時代を生きた男たちが、人の心の裏や言動の裏を察知し、それにどう対処するか。上に立つ人間の器量が狭い場合の、能力が高い部下の忍従と意思の複雑さ。安易さがないしっかりとしたドラマになっている。会社運営でのさまざまな局面と「小説太田道灌」の世界が重なりました。この時代、女も女の出来る役割を果たして、気が抜けなかったのでしょうか。「ならば当方滅亡」最後の道灌の言葉が、すっきりと入ってきて、快感さえあります。この小説は、絶対に、「男が書いた男に読ませる」小説です」 **福岡県 Y. N さん・文芸同人**

◆「小説太田道灌、読み直し、冴えた筆に感動しました」 **小田原市 H. T さん・図案家**

◆「全編張り詰めた文章のように思える。あたかも剣豪の前に居合わせられたような…
研ぎ澄ませた…で、以前いただいた岩漿 10 号の「小説太田道灌 兵庫無慙」を再読、
こちらの方で、ほんの少しホッと息をさせてもらったような」伊東市 N. M 氏・歴史家

◆「道灌」は、構成・文学的表現も素晴らしいと思いました。私なぞのように記録や伝
承を散文的に書いていると、歴史文学の圧倒的な表現に引き込まれて、こちらが歴史の
真実だと、こころが納得してしまうことが多いものです。ますますの検討を祈ります」
伊東市 K. K 氏・歴史研究家

◆「多彩な書き手でいらっしゃいます。改めて今回、歴史小説を拝読して驚きました。
私には「太田道灌」は難しかったです。ほとんどその知識と、その時代についての興味
がなかったせいですが、勉強させていただきました。…歴史小説を書く友人がいま
す。資料集めにやはり五年、十年かかり、いざ書き出すと、その中から半分以上は捨て
ざるを得ないとのこと、そうでしょう。そこが史実を扱う歴史小説のむつかしさと、十
分判ります」熱海市 H. O さん・文芸誌主宰

◆「頂きました御本は朗読いたしまして、有難うございました。非常に読みやすく、考
証がキチッと出来て良質の本になって感動しました。製本前の作では季正が影に出てい
ましたが、今回は兵庫でめられております。これは成功だったと思います。…言葉に付
いて文句が多かったと思いますが、大衆小説というか、一般的に使い回した言葉を目
立つ所では使わないこと。『あとがき』がよく出来ていましたので、何か後記から読み
始めた方が、なんて気になりました。…良い本になりましたネ。更なる思いが重なる
ということです。時代ものでこれ文書ければ、言挙げせず、なんですけど」

藤沢市 F. I さん・文芸同人

◆「応仁の乱の後の関東の戦国時代の下克上を颯爽と生き抜いた太田道灌を描いた本格的
な歴史小説である。戦国時代の関東の数多くの小さな城とその主達の離合集散の中で
江戸城の太田道灌が主君と仰ぐ関東管領、扇谷上杉定正に殺されるまでの話である。手
を下したのは道灌子飼いの武将曾我兵庫である。川越城の主、定正のもとに幽閉されて
いる兵庫が何故尊敬している道灌を切らねばならなかったのか？ 道灌も兵庫も人間
味溢れる武将である。最後の悲劇的クライマックスへいたる必然性を、周りの家臣や女
性たちの心の揺れを活写しながら読者に納得いくように描き出している。この小説は構
成に隙が無く、ストーリーがダイナミックに展開していく。骨太の本格的な歴史小説で
ある。とくに関東地方の戦国時代の群雄割拠の歴史はあまり知られていない。文献をく
まなく渉猟、考証し、足で現地に立ち、戦国時代の人々の激しい心の動きを想像しなが
ら描いた小説である。

誰もあまり取り上げなかった関東の戦国時代を取り上げたことがこの小説の新機軸
でもあろう。そして流れるような文章が独特のリズムをかなで、この長編を読みやすく
している。最初の書き出しはこうである。「蛟竜とは角のない竜のことで「みずち」と
もいう。江戸城築城で有名な太田道灌は蛟竜であった。角さえあれば一気に天に昇れた

のである。では、道半ばにして斃れた道灌に、欠けていた角とは一体何だったのだろうか」馬場駿は何が欠けていたのかとは断定しない。読者が各人それぞれの解答を考え出せるように色々な部分に明快なヒントを与えている。この最初の文章を読み返しながらか章を読んでいくと人間の偉大さ、弱さがみにつまされて「やっぱり道灌は殺される悲劇を避けられない」という思いにとられる」 **小金井市 K.G 氏・元教授**

◆「貴著を拝読させていただきました。力作と感服いたします」

東大和市 T.O 氏・道灌研究家

◆「本格的に楽しませていただきました。それも道灌を主人公にしてぐいぐい…というのではなく、その周りの人物から迫っていく、という、通の書き方！ これはスゴイいですね。特に季正と兵庫の言動が、道灌という人や時代や、これから起こる本格的な戦国時代を展開させていく、という凝った書き方で、本格的な読者を唸らせるものでした。上杉定正、顕定の人となりも、納得させられる形で登場しています。戦国入口の武士団の群像が、作者の想像力で、そこに生きて働いているかのように展開されているのが、楽しいといえますか、スゴイと思いました。よくもここまで構成されたと思います。玄鬼、さらに北条早雲が、サイドから横系のようにしっかり絡んでくる、のもよく書かれておりますので、ただただ『スゴいなあ』と思わせてくれました。しかし、『素人の読者』として、道灌の死(自死)が今ひとつ残念なのは…そう思わせてくれました。もっともこれは、作者の極上の美学、生き方に基づくものと『玄人の読者』は思わずにはいられません。…こうして、大人物に傾倒して、時代を描ききった馬場駿という作家の構想力と表現力に、尊敬の念を心底から抱かずにはいられません」

八王子市 M.Y 氏・詩誌主宰

◆作者としての一言◆

これほど読み込まれたことが、また読後感を頂戴したことが、初めての上梓だったこともあり感謝感激でした。働きながら調査、執筆という十五年は私にとって長い年月でしたから。嬉しかったと言えば、歴史の部分だけを相当細かく吟味され、ご指摘を頂戴したこともあります。有難かった一面、拙作は『小説太田道灌』であって歴史研究書ではありません。それとあまりに史料やプロ作家が書かれた道灌小説が少なすぎました。このことが、なぜ道灌は暗殺を予知しながら手薄な護衛でいわば〈敵地〉に赴いたのかという疑問に特化し、暗殺された年を「いま」として資料、文献で分かっている「過去」のみにつき救い上げて道灌を描くという手法を採った所以です。江戸城築城以前のことも、分かれば書きたかったですね。不足や反省は、私家版として刊行以後ずっと感じていました。